

研究課題

小学校の英語活動におけるコミュニケーション能力の育成を目指した指導と即時評価の工夫

副題

～ICTを活用して～

学校名	鹿屋市立田崎小学校
所在地	〒893-0032 鹿児島県鹿屋市川西町4780番地
学級数	20
児童・生徒数	563名
職員数/会員数	29名
学校長	西園 羊二
研究代表者	西園 羊二



1. はじめに

鹿屋市は、平成15年度から、構造改革特別区域特区の認定を受けるなど、「英語活動」に全市をあげて取り組んでいる。本校においても、「英語科」の指導法の実践研究、効果的な教材の研究開発、学級担任を中心としたALTやJTE（英語指導講師）との連携のあり方等の研究に取り組んできた。その中でも特に、子どもたちのコミュニケーション能力の育成に着目し、歌やチャンツ、ゲームを通じた会話活動の工夫を行ってきた。

これらの実践を通して、楽しんで英語活動を行う姿が多く見られるようになった。しかし、その一方で高学年では、話すことやコミュニケーションをとることに苦手意識をもつ子どもも出てきた。また、学級担任からは、英語指導に対する不安や英語教材の準備等に対する課題も明らかになった。

そのような中、実物投影機を用い、英語ノートを拡大提示しながら授業を進めてみたところ、苦手意識をもっていた子どもたちも積極的に取り組もうとする姿が見られ、コミュニケーション能力をつけるための手段として、ICT活用の有効性を感じることができた。また、教師側においても、煩雑な準備や授業中の操作の負担が軽減され、さらに、授業中の子どもを即時評価し、実態に応じたコンテンツを提示することができるといった利点もあった。

このことから、系統的に視聴覚教材を活用することで、英語活動に対して興味・関心がさらに高まるとともに、お互いを理解し合う経験が豊かになり、コミュニケーション能力の育成が図られるのではないかと予想できる。

本校は、本年度から3年間、「かのや英語大好き特区」田

崎・吾平英語教育圏拠点校となり、校内だけでなく英語教育圏内7小中学校の実践・研究の推進役を担うことになる。そこで、本年度は、デジタルピクチャーカードや電子黒板などICT活用を研修の中に位置づけ、「小学校の英語活動におけるコミュニケーション能力の育成を目指した指導と即時評価の工夫」という研究に取り組み、英語活動のあり方を探っていく。

2. 研究の目的

本校では学校教育目標である「自ら学び、心豊かにたくましく生きる子どもの育成」の実現のために日々の教育活動に取り組んでいる。しかし、実態としては子どもたちが優しい言葉づかいができなかったり良好な友人関係を築くことができなかったりすることがある姿が見られることが課題である。

また、新学習指導要領の外国語活動においても、コミュニケーション能力の素地の育成がうたわれており、それらをふまえ本研究を推進していく必要があると考えた。

3. 研究の方法

- (1) デジタルピクチャーカードや電子黒板などICT機器の内容・特性を理解し、実践案を考え、英語の授業の中で実践し、効果を分析し、改善を図る。
- (2) ICT機器を全職員がより活用するために、機器の操作方法や英語ノートデジタル版の機能などの研修や、活用方法を考えるワークショップを行う。

4. 研究の内容と経過

(1) ICT 機器等の効果的な使用法の研究

① デジタルテレビ、実物投影機、プロジェクター、電子黒板、英語ノートデジタル版

デジタルピクチャーカードの効果的な使い方について研究を行った。

<第5学年実践例>

単元名 「好きな食べ物」

本時のねらい「食べ物の名前や相手の好きな果物を尋ねる英語表現を使うとともに、楽しく英語を学習する活動を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する」

ICT 機器活用のねらい

ICT 機器を活用する場面を多く設定することにより、普段のグループ活動とは違い、今まで知らなかった友だちの一面を見たり知ったりするきっかけ作りをする。

職員の ICT 機器実態調査で活用が少なかったプロジェクターと実物投影機、電子黒板のより一層の活用を図るためのきっかけ作りをする。

時間(分)	主な学習活動	使用したICT機器
1分	1 あいさつ	
2分	2 歌 「What color do you like」	デジタルテレビ パソコン
	3 前時の復習 ・シルエットクイズ ・リズムチャンツ	実物投影機 プロジェクター デジタルピクチャーカード プロジェクター、電子メトロノーム
	4 本時のめあて ・HRTとPC、子どもたちとのスキット	実物投影機 プロジェクター 
5分	5 フルーツパフェ作り ・HRTと子どもでスキット	パソコン、英語ノートデジタル版 電子黒板
10分	・グループでフルーツパフェ作りを行う。	ノートパソコン 英語ノートデジタル版
10分	・班ごとに発表する。	ノートパソコン、プロジェクター
4分	6 振り返り	実物投影機、プロジェクター
1分	7 あいさつ	

(2) 職員の ICT 機器活用促進

本校では職員に1台ずつのパソコンと校内ネットワークを整備し、プロジェクターや電子黒板もそろえてある。しかし、パソコンは公務用としては活用されているが、授業に活用することはほとんどなかった。また、電子黒板やプロジェクターに関しては、使ったことのない職員がほとんどであり、ICT 機器に対して苦手意識を持つ職員も少なくなかった。

そこで、英語指導に対する不安や英語教材の準備等に対する課題解決のためには職員の ICT 活用の促進を行う必要があると考えた。そこで次のようなことを行った。

① 職員研修

本年度はこれまでに3回ずつ ICT 機器活用研修と研究授業をおこなった。

5月31日	・ICT研修 ・プロジェクター ・実物投影機
8月2日	・ICT研修 ・電子黒板 ・セキュリティーについて
8月20日	・ICT研修 ・デジタルピクチャーカード

② 環境整備

ICT 機器に対する苦手意識の最大の理由は使い方がよく分からないことや慣れていないためであると考えた。そこで、実物投影機とプロジェクター、電子黒板を新たに購入し、ICT 機器をコンセントにつなぐだけで活用できる環境作りを行った。

ICT 研修により、職員の活用もよくなされるようになってきた。

また、普段の学習にも活用することにより児童が準備をしたり、発表に活用したりすることができるようになってきた。



(3) 即時評価について

英語科の学習においては、他の教科と違いテスト等で力を図るわけにはいかない。授業に対する態度や反応が一番重要になってくる。授業時間内に即時評価を行いフィードバックを行うための、ICT 機器活用場面や方法について研究を続けている。

5. 研究の成果と今後の課題

(1) ICT 活用事例研究授業実施前後本校職員の変容

① 授業で ICT 機器をどれぐらい活用していますか。

(実施前)

ICT機器名	よく使う	使う	あまり使わない	使わない
① プロジェクター	10%	0%	40%	50%
② 実物投影機	5%	0%	45%	50%
③ デジタルテレビ	20%	40%	30%	10%

② 今回の授業で使われた ICT 機器をどう思いましたか。

(実施後)

ICT機器名	是非使ってみてみたい	使ってみたくない	あまり使いたくない	使わない
① プロジェクター	15%	85%	0%	0%
② 実物投影機	70%	30%	0%	0%
③ デジタルテレビ	45%	55%	0%	0%

③ 授業後の ICT に対するイメージ

- 子どもの興味を引きつけるのにたいへん有効である。
- 使いこなせると便利である。
- 普段から子どもにICT機器に慣れ親しませる必要がある。
- 各学級でICT機器の準備をするのは難しい。

(2) 即時評価について

ICT 機器、特にデジタルピクチャーカードを活用することによって HRT の注意をすべて児童に向けることができた。気になる子どもたちの表情や口の動きを見ることにより繰り返し練習を行うことができた。

ICT 機器を使用することによって、英語学習の際、子どもたちの学習意欲やコミュニケーションを高めたり、効率的に授業を進めたりすることができた。また、職員に対するアンケートでも全員が ICT 機器に対して肯定的になり、使用に積極的になってきた。より一層の活用を促進するために、今後は全教科での活用場面を増やしていくとともに、活用方法を全職員で考えていき、教育課程等に明記できるようにしたい。

子どもたちへのアンケートの結果では、授業が楽しかったとほぼすべての子どもが解答した。楽しいからもっと使って欲しいという意見も多い。

しかし、必ずしも ICT が授業のすべてではないし、ICT を活用すれば英語ができるようになるというわけではない。ICT を使わないほうが良い場面も考えていくことで、より

ICT 機器ならではの活用方法を探っていきたいと考えている。また、JTE との連携についてもさらに研究を進めていかなければならない。

本年度の活動を通して、児童・職員に対して以下の課題が考えられる。

児童	<ul style="list-style-type: none"> ① 高まった興味関心をいかに持続させるか。 ② ICT機器を扱う上での約束。 ③ 英語に苦手意識を持っている児童に対するさらなる手立て。
職員	<ul style="list-style-type: none"> ① ICT機器の充実（特に常設化するためには複数台必要）。 ② パソコンや電子黒板、プロジェクター取り扱い方のマニュアル作成と職員研修の充実。 ③ ICT活用事例のさらなる紹介。

6. おわりに

本年度は、3年間に渡る「かのや英語大好き特区」田崎・吾平英語教育圏拠点校としての研究 1 年目として研究をスタートさせるため活用促進のための時間を多くとられ、コミュニケーション能力の育成や即時評価の方法の研究を目的としていたのに不十分だった点は否めない。

しかし、職員の意識が高まり活用が増えてきたことはうれしいことであるし、全員がその効果を感じている。今後も ICT の活用を続け、効果的な活用ができるようにしていきたいと考える。